

## 「重症心身障害者の尊厳と価値についての一考察」

～重症心身障害者の入所施設と通所施設の職員の語りの分析を通して～

白川病院 岡本真理子(07763)

キーワード：重症心身障害者、尊厳、価値

## 1. 研究目的

本研究では、障害者福祉施策の上で「置き去り」されてきたのではないかと考える重症心身障害者を対象として、社会福祉の新たな価値を追求しようとするものである。平成15年の支援費制度の導入で、それまでの措置から利用者自身でサービスの選択(契約)ができるように制度設計が変更された。また平成18年には障害者自立支援法が導入され利用者に1割の自己負担を求められるなど、これまでより、障害者自身の自己決定や自己負担の重要性が訴求されるようになってきている。この一連の障害者福祉施策の中には、自立できる障害者という「望ましい」障害者像が無意識に前提とされているのではないかと考えた。なぜならば、一連の障害者福祉施策の中で、「重症心身障害者」に代表される自立できない障害者は置き忘れられているように感じるからである。しかし、重症心身障害者とのかかわりを通して、与えるだけでなく重症心身障害者から「与えられたものがある」との言葉が支援者から多く寄せられる現実もある。そこで、支援者への聞き取り調査や筆者自身の体験、また、先人者の取り組みを通して、重症心身障害者から我々に与えられているものは何かを考察することによって、福祉制度の中で忘れ去られてきた重症心身障害者の存在の意義・意味を明らかにする。また、その意義や意味が、社会においてどのように位置づけられるのかを考察することを通して、社会福祉の新たな価値の在り方を検討することを目的とする。

## 2. 研究の視点および方法

- (1) 先行研究のレビューにより、障害者福祉の歴史において重症心身障害者がどのように扱われてきたのか、その実態を明らかにする
- (2) 入所施設、通所施設職員5名ずつ計10名に「これまで重症心身障害者に携わり葛藤した事例と納得した事例について」インタビューを実施する。
- (3) 語りの内容ごとにコーディング、カテゴリー化を行い、事例-コードマトリックスを作成する。その関係性の構造を図式化し、その分析により中核的カテゴリーを抽出し、重症心身障害者の尊厳と価値についての概念モデルを作成する。

## 3. 倫理的配慮

インタビューにあたっては十分な説明を行い、同意を得た。インタビューに協力すること以外の迷惑がかからないことを保証した。インタビューに協力するかしないかは、本

人が自由に決めた。

#### 4. 研究結果

本研究の目的である、「重症心身障害者」の「尊厳」、「価値」を明らかにするために、支援者 10 名にインタビュー調査を試み、私たちが重症心身障害者から何を受け取っているのか、その価値を探求することを試みた。質問内容は「重症心身障害者と関わってきて葛藤した事例と、納得した事例について述べてほしい」というものである。概念モデルにおいて、「重症心身障害者に関わる喜び」は、人と人が繋がりを求めることで、何か「受け取っているもの」があることが分かった。それは、「自分の中に潜在する他者と繋がる欲求と達成された時の喜び」ではないかと考えた。自分は気付いていなかったが、コミュニケーションが一番困難であると思われる重症心身障害者と繋がったと感じられた時、自分の中に潜在的に潜んでいた欲求が満たされ、大きな喜びとなる。分析の結果得られた「自分の中に潜在する他者と繋がる欲求と達成されたときの喜び」について、鯨岡の「自己充実欲求」と「繋合希求性」を用いて述べる。人は「どこまでも自分を貫きたい」のに「一人では生きていけない」という相矛盾欲望を持つ、それは生活していく上で他者とのコミュニケーションの不可欠を物語る。その喜びが自分自身の「みずからの欲望を貫いて自己充実を目指す」ことに繋がり、支援者や周りの人間自身の存在価値をも見出していると言える。重症心身障害者の今ここに「生きる」という最大の仕事は、自分の「能力」を精いっぱい使い「仕事」をしていると、周りの人間を納得させる。

竹内は、「能力」の根源は「当該個人の「自然性」と諸環境や他者（社会的生産物等も含む）との相互関係自体」であり、「能力の共同性」の観点からすれば、「弱者」（重症心身障害者）個人が所有する「低い能力」は、それが特定される瞬間において、「低さ」を補填する人的要因も含めた環境等の能力の不備に起因することにもなると述べている。また「低い能力」に応じた適切な配分・処遇（弱者差別の破棄）は可能という把握も明確になり、ここから、個体能力観の克服を軸とする「能力の共同性」に依拠して、新たな制度やこれを担う諸個人の在り方も展望されるとも述べている。「低い能力」を持つとされる重症心身障害者は、周りにいるものに「自分の中に潜在する他者と繋がる欲求と達成された時の喜び」に気づかせ、その喜びを与えてくれる重要な「能力」を持つと考えられる。社会には、自己主張できず、経済的生産活動に携われなくとも「能力」を持って生きているたくさんの方がいる。全ての人々に「能力」は存在し、その様々な「能力」の集合体が社会である。有用とされる能力・役に立つとされる能力以外も認めていこうと考えるのは、社会は一人ひとりがバラバラに生きているのではなく、共同で「時間・空間・社会」を所有しているからである。「生産する」ことに価値を見いだすとするならば、重症心身障害者にとって「生きる」ことが「生産する」であると考え。共にあるがゆえに、豊かな社会を作る媒介をするのが「社会福祉」であり、経済的な価値ではなく社会的な価値を具象化するものであると考え、ここに重症心身障害者の尊厳と価値を述べることにした。